

平成 27 年度 インクルーシブ教育システム構築モデル事業 成果報告書Ⅰ

【インクルーシブ教育システム構築モデルスクール】

教育委員会名	岐阜県岐阜市教育委員会
--------	-------------

概 要

モデルスクールの概要（平成 27 年 5 月 1 日現在）

	モデルスクール名	在籍者数	教職員数
1	岐阜市立三里小学校	784 名	40 名
2	岐阜市立市橋小学校	776 名	47 名
3	岐阜市立島中学校	618 名	44 名

【事業概要】

1. モデルスクールの特色（特別支援教育に関する事項）

A 小学校には通常学級に在籍している教育上特別な配慮を要する児童が多数いる。その中で、診断がある児童も多く、その診断も多様であるが、教育上特別な配慮を要するすべての児童に「個別の教育支援計画」を作成できている。「個別の教育支援計画」を作成する際に、保護者と合意形成を丁寧に行っている。

自分の気持ちをコントロールすることが難しかったり、友達とのコミュニケーションをうまくとることに課題があったりする児童が、集団の中で望ましい人間関係を築きながら生活するために、どのような環境整備や合理的配慮が有効なのかを実践・検証していくことが必要であると考えている。

B 小学校では、肢体不自由がある児童が通常学級で生活している。どのように環境整備を行っていくことが必要なのか、学習内容の変更・調整を行っていくことが必要なのかを考えることが必要であると捉えている。

特別支援教育支援員の支援の在り方を明確にすること、保護者との連携を密にすることが必要であると考えている。

C 中学校には、LD・ADHD等通級指導教室があり、ソーシャルスキルトレーニングなどを取り入れながら、集団の中で適応していくことができるように支援している。個別の指導で自己肯定感を高め、その成果を通常学級の中で生かすためにどのような合理的配慮を行っていくことが有効なのかを実践・検証していくことが必要であると考えている。

2. 取組の概要

【教育委員会がモデルスクールに対して行った取組及び支援】

教育委員会では、学校を定期的に訪問し、特別支援教育コーディネーター等学校関係者との連携を行ってきた。また、合理的配慮協力員にも相談しながら、取組の方向性や状況について助言を受けてきた。特別支援教育コーディネーター研修会等で、合理的配慮について説明するとともに実践例として紹介し、普及していくことをねらっている。

【モデルスクールとして行った取組】

A小学校では、保護者との合意のもと、合理的配慮の観点をもとに作成した「個別的教育支援計画」をもとに、関係職員・保護者が支援の方向を明確にしている。また、医療機関との連携にも力を入れ、助言を受けながら支援している。保護者にも支援の方向を伝え、共通理解を図りながら支援にあたっている。自分の気持ちをコントロールする姿、友達と円滑にコミュニケーションをとる姿を目指して、ソーシャルスキルトレーニングも取り入れるなどの学習内容の変更・調整を行ってきた。

B小学校では、保護者との合意のもと、合理的配慮を検討し、決定してきた。また、作成した「個別的教育支援計画」をもとに、環境の整備や合理的配慮の提供を行ってきた。普段の生活場面では、特別支援教育支援員がどのような支援を行うことが必要なのかを考えてきた。また、活動場面では学習内容の変更・調整を適宜行いながら、学校生活に充実感を味わえるように取り組んできた。

C中学校では、LD・ADHD等通級指導教室担当と通常学級担任、教科担任が目標を共通理解し、同一歩調で支援していくことを大切にしてきた。対象生徒の心理状態を的確に把握し、個別の学習を取り入れたり、教室での支援の在り方を工夫したりしながらどのような配慮が必要なのかを考えてきた。LD・ADHD等通級指導教室でソーシャルスキルトレーニングを取り入れ、通級指導教室での学びを通常学級で生かすことを大切にしてきた。

3. 成果及び課題

- ・「個別的教育支援計画」を作成するにあたっては、合理的配慮の在り方について、保護者との懇談の中で合意形成を図ってきた。「個別的教育支援計画」や「個別の指導計画」に明記している合理的配慮については定期的に評価し、その都度加除修正を行うことで、そのときの児童生徒の実情に応じた合理的配慮が提供できると考える。
- ・本人の特性を担任などの学校関係者はもちろん、学級の仲間も理解していることは重要である。そのことが本人の授業における積極的な姿へとつながっていき、集団の中での適応や、学校生活を楽しむ姿につながっている
- ・本人の状況に応じて相談室で学ぶ機会を設定する等、学習内容の変更・調整を行うことは重要である。通級指導教室を利用している児童生徒については、通級指導教室担当者と通常学級担任が目標を共通理解したことで、通級指導教室で学んだことを生かす姿が見られつつある。教科担任や特別支援教育支援員も同一歩調で支援したことも、本人の安心感につながった。
- ・支援員を多く配置することを保護者の多くが望まれており、それに応えようと努力しているが、限りがあるのが現状である。有効な合理的配慮を探るとともに、集団の中で一人一人が大切にされる学級経営が重要であり、教師の力量アップをさらに図る必要がある。